

今年「丁酉」の年を迎えた、その本当の意味と世界の「鶏」の縁起

1 今年「酉年」ですがそもそも「十二支十干」とは

今年、平成 29 年、西暦では 2017 年になりました。日本では、大体がこの二つの表記になると思います。このほかにもイスラム暦や中華民国暦など様々な表記の方法があります。日本であっても、神武天皇が即位した時を基準に「皇紀」という年数の数え方がほかにあります。正式には「神武天皇即位紀元」といい、旧暦の紀元前 660 年 1 月 1 日が新暦の 2 月 11 日となるので、現在でも、2 月 11 日が「建国記念日」となっているのです。『日本書紀』神武天皇元年正月朔の条に「辛酉年春正月庚辰朔 天皇即帝位於橿原宮是歳爲天皇元年」（辛酉（かのととり）の年の春正月、庚辰（かのえたつ）の朔（ついたち）。天皇、橿原宮に於いて即帝位す。この年を天皇元年と為す）と記述があるために紀元前 660 年から数えるとされているのです。日本の紀元を神武天皇の即位とするのは、古事記や日本書紀が編纂されたのちから、日本国内ではかなり一般的であったのですが、それが現在のように紀元前 660 年となったのは、江戸時代以降「国学」という学問が盛んにされるようになり、記紀の研究がされてからということになります。ちなみに、今年神武天皇即位紀元 2677 年に当たります。

ところで、昔の人といっても、明治時代に「明治」という元号を定め、太陽暦を使うことが全国的に広まるまで、一般的には「十二支十干」（じゅうにしじっかん）で年数を表記していました。「十二支十干」とは、「十二支」という、すべての物事を 12 の現象で分け、その周期で考える考え方です。もともとは、古い中国などの考え方で、天体すべてを 12 に区切って物事を考えます。その起源はかなり古く、もう一つの「十干」が後漢時代の陰陽五行説にあるとされていますが、その時にはすでに「十二支」の考え方は存在していたとされています。ですから少なくとも、後漢時代よりも古くからこの考え方はあるとされています。

一方「十干」は、陰陽五行説から生まれてくる考え方です。すべての現象は、「木」「火」「土」「金」「水」の 5 つの要素からできており、その各々に「陰」「陽」があるという考え方です。この陰陽を「兄」「弟」で示します。ですから「十干」となると「木の兄」で「きのえ」、次に「木の弟」で「きのと」と読み、その後も「火の兄」で「ひのえ」、「火の弟」で「ひのと」というようになります。実際に千年を超える歴史を、「十二支十干」の表記で過ごしていたのです。ですから、今年ですと「丁酉」、つまり「ひのととり」の年となります。このようにして「60 年単位」で物事をすべて表していたのです。

2 今年「丁酉」の特徴は何でしょう

実は、この十二支には、それぞれに意味があるとされていたのです。ここに一覧で書いてみましょう。

- 子……“孳”で、陽気が色々に発現しようとする動き
- 丑……“紐”で、生命エネルギーの様々な結合
- 寅……“演”で、形をとっての発生
- 卯……同音“冒”に通じ、開発の意
- 辰……“震”、同音“申”に同じ、生の活動
- 巳……“巳”に通じ、陽盛の極、漸く陰に移ろうとする所
- 午……“忤（さからう）”に通じ、上昇する陰と下退する陽との抵触
- 未……“昧”で、陰気の支配
- 申……陰気の支配
- 酉……酒熟して気の漏れる象。陰気の熟する所
- 戌……同音“恤”であり、“滅”である。統一退蔵
- 亥……“核”で、生命の完全な収蔵含蓄

では同時に、「十干」にもそれぞれに意味があります。やはり書き出してみましょう。

- 甲（きのえ）……草木の芽生え、鱗芽のかいわれの象意
- 乙（きのと）……陽気のまだ伸びない、かがまっているところ
- 丙（ひのえ）……陽気の発揚
- 丁（ひのと）……陽気の充溢
- 戊（つちのえ）……“茂”に通じ、陽気による分化繁栄
- 己（つちのと）……紀に通じ、分散を防ぐ統制作用
- 庚（かのえ）……結実、形成、陰化の段階
- 辛（かのと）……陰による統制の強化
- 壬（みずのえ）……“妊”に通じ、陽気を下に妊む意
- 癸（みずのと）……“揆”に同じく生命のない残物を清算して地ならしを行い、
新たな生長を行う待機の状態

というような意味になります。今年は「丁酉」ですから、つまり「陽気の充溢して酒熟して気の漏れる象。陰気の熟する所の年」ということになります。ところで、十干の方は、何となく「木」「火」といったことに通じる意味になっていますね。しかし、十二支に関していえば、例えば「酉年」なのに「鳥」や「鶏」とは全く関係がない話になっています。これはどうしてでしょうか。実は、十二支の動物は、本来ここに書いたような意味であり、天体を分割したものであるのに、動物そのものは、あとで、「天体の意味合いなどが全くわから

ない庶民に対して、わかりやすくするために動物を当てた」というようにいわれています。ですから、もともとは「酉」という字に「さんずい」をつけると「酒」という字になるように、「収穫の時期」であり、「十番目」つまり「食欲と収穫の秋」である「十月」を表す文字が、この酉年を表す漢字に使われているのです。「酉」という字は、「酒の注ぎ口」という意味で、「米」が「酒」になって世の中に現れるということから、「実る」とか「収穫を得る」という意味になるのです。では、この「酉年」が、どうして「鶏」になったのでしょうか。

3 「酉年」は「鶏年」ではないのに、なぜ「鶏」を意味するのか

「酉年」が「鶏」であるということは、無学の庶民のためにわかりやすく当てた、という説が有力です。このことからわかるのは、「鶏」にあまり意味がないということと、もう一つは庶民であっても、暦や十二支十干の知識が必要だということの二つのことを意味します。庶民でも知識が必要であるということは、容易に想像できます。というのも、例えば稲作をするのに、種もみをまく時期や田植えを行う時期、それらの季節などを考えるのにあたって、すべて時間や暦の感覚が必要になります。

また、十二支十干は方角なども表します。もともとが、天体を十二分割したことから起きているのです。つまり、東西南北の方角を十二分割したのと、立体を表す角度を十二分割にしたことによって、それらを解釈していきました。その天体の動き、時に月と星の動きを見て、年・月・日・時を知っていたので、自然に「年月」や「時間」を表すようになったのです。また、風向きや土地の方角なども庶民は知らなければなりません。そのような生活に密着した土地、時間、季節のことを知らなければ、作物などの収穫量が減ってしまうということになります。そのために、庶民にわかりやすく身近な動物を当てて、例えたということがいわれているのです。

しかし、それではなぜ「十番目」が「鶏」なのか、よくわかりません。また、それが定着したということは「十番目」と「鶏」がうまく適合して、十二支を使っている人々が、そのことを理解するということになります。実はあまり関係がないと言いながらも、そのため、それなりに何らかの意味があるということになります。では、その意味はいったい何なのでしょう。

4 「実り」を表す十番目の干支が、「鶏」になった理由

実は「鶏」は、非常に縁起の良い鳥とされています。「鶏」は和名「カケ」また「クダカケ」といわれています。「クダカケ」というのは、百済から渡ってきたという意味ではないかといわれています。「カケ」というのは、鶏の鳴き声を「カケロ」と表現していたために、「カケ」といわれるようになったとされています。

『神代巻』や『古事記』に、「天照大御神が岩戸の中に籠ってしまって世の中が真っ暗に

なってしまった時、八百万神は、常世の長鳴鳥を集めて互いに長鳴せしめた」と書いてあります。「長鳴鳥」は「ながなきどり」と読み、江戸時代の国学者の本居宣長は、この『古事記』に書かれている「常世の長鳴鳥」のことを「鶏」として分析しているのです。太陽の神である天照大御神が、天岩戸の中に隠れてしまい、世の中はずっと夜になってしまっているのに、突然、鶏が「朝を告げる鳴き声」を上げてしまえば、天岩戸の中に入っている天照大御神が「自分以外に太陽がいるのか」ということで驚き、外の世界に興味が出てくるということになるのです。

「常世の長鳴鳥」といわれた「鶏」は、朝日を見て、その朝日に向かって長く鳴き声を上げます。そのことは多くの人が知っていることであるとされています。そのために、「鶏が一斉に鳴く」のは「朝日を呼ぶ」ということになるのです。朝日というのは「昇り調子」を意味する単語であり、とても縁起が良いとされています。そのために「収穫を表す」時は、「神」、特に「太陽の神」を表すことが少なくないのです。このことは仏教の世界でも、同じように鶏を尊重する風習があります。神社でも、仏教でも、インドでも、鶏を神社や寺院の中に放し飼いにし、勤行の修業の時を示すために、鶏を飼うことを特に禁止しなかったのです。そしてそのことを理論づけるために、昔は「鶏に五徳あり」とされていたのです。「鶏の五徳」とは、『韓詩外伝』に「頭に冠を戴いているのは、そもそも文章や学問において徳があることを示す」とされ、「足に距（けづめ）を持つのは、敵と戦うための武の徳があることを示す」とされています。また、「鶏が敵前において、戦うことは勇の徳があることを示す」「食事を見てお互いに呼び合うのは、仁の徳」「夜を守って朝になると鳴き、時を失わないのは信の徳があることを示す」とされているのです。

5 武士の時代・町人の時代にも珍重される鶏

神社や仏教の世界では、「鶏」が「神や仏の世界で特に許されている」生き物になりました。朝日に向かって鳴く、ということが「太陽を求めている」ということになり、そのことは、非常に大きな「信用」になっているのです。

このことは武士の世界になっても同じように、鶏が珍重されることになるのです。『常山紀談』という本の中に、姫路城主になった大名の池田輝政が、武士の重宝とすべきは「領分の百姓」、「譜代の士」、「鶏」の三品であると言っていると書かれています。「なぜ、そのように思うのですか」と尋ねると、池田輝政は、「百姓は田畑を作り、大名だけでなく、すべての階級の武士を養っている。このことは、一つの重要な宝である」としています。「譜代の士は、もし喧嘩したり、お互いの気が合わなかったり、あるいは不満があったりして、自分から辞めて行ってしまったとしても、そのまま敵国に行ったとしても、敵国大名や武将は、譜代の士がそう簡単に元の大名家を裏切るとは思えず、そのために、もしかしたらスパイかもしれないと思って、結局、その譜代の士を召し抱えることはせず、最終的には自分のところに戻ってきて、もう一度役に立つ働きをしてくれる。このことは大名にとって第二の重要

な宝である」としています。そして「鶏」については、「目に見える合図や耳で聞こえる合図は、簡単に敵国にばれてしまうので、敵国においてはそのような合図を送ることができないが、鶏の鳴き声は、誰もが朝に鳴くものであるということを知っているので、一番の鶏の鳴き声は、人々を目覚めさせ、二番鶏の鳴き声は食事の時間、三番鶏の鳴き声で兵として集合するなど決めておけば、敵にばれることなく、領内のすべての兵に合図を送ることができる。それは、三番目の重要な宝である」ということを言っています。実際に、これを実践し、陣中で鶏を放し飼いにした人を見て、徳川家康がほめたというようなことも別な書物に残っているほどです。

さて一方で、江戸時代には商人や町人においても「鶏は縁起の良い鳥」であるということをいわれるようになります。それを示した伝説が「金鶏伝説」といわれるものです。「金鶏伝説」という言葉は、あまり聞かないかもしれませんが。簡単にいえば、「山または塚に埋められた金鶏が、多くは元旦に鳴く」という伝説です。このような伝説は日本全国各地に数多く伝えられており、元旦に鳴くもの、鳴き声を聞くことを吉とするものがほとんどで、日本全国の「長者伝説」につながるものがあります。岩手県西磐井郡平泉町の金鶏山は、ちょうど現在の中尊寺金色堂と毛越寺のほぼ中間に位置し、信仰の山とされています。中尊寺金色堂を建立した藤原秀衡が、高さ数十丈に築いて、漆一万杯と黄金一万両に黄金の雌雄の鶏を埋めて、藤原氏とこの地の鎮護としたとされています。「朝日さし 夕日輝く木の下に 漆万杯 こがねおくおく」と、古くから謡われていて、多くの人に知られています。

もともと「金鶏伝説」は、この藤原秀衡の逸話をもじっているとされています。もちろん、藤原秀衡は元の話も何もなく、そのようなことをするはずがありません。もともとは、中国に「金鶏伝説」があり、極楽浄土の上に金の鶏が住む星があり、その星に住む鶏が吉凶の時に鳴き声を地上に届かせるという伝説があります。当然に「西方浄土」があり、その浄土の餌を食べているから金色に輝く鶏が住んでいるとされていたのです。その伝説が日本に伝わってきて、神社や寺院、長者の家の土の中に、「金の鶏が埋まっている」と考えたのです。

1588年（天正16年）、土岐氏が斎藤道三に攻め滅ぼされた時に、代々の家宝の金鶏を井戸の底へ捨てて逃げましたが、この鳴き声を聞いた者は長寿であるといわれています。このように斎藤道三のような有名人が出てくるものではなくても、長野県下伊那郡の朝日松、岐阜県山県郡大桑村（現・山県市）の城山、奈良県添上郡東山村（現・山辺郡山添村）・針ヶ別所村（現・奈良市都祁）・豊原村（現・山添村）の3村の境である神野山頂上の黄金塚、広島県三次市の鶏淵、宮城県栗原郡金田村（現・栗原市）の鶏坂など、「金」「鶏」というような地名の多くに、そのような話が残っていて、それらが長者伝説につながっています。

ところで「鶏と長者伝説」は、実は日本だけではなく、世界各国にそのような話が存在しています。日本で最も有名なのが「ジャックと豆の木」です。ジャックは母親に言われて牝牛を市場へと売りに行きます。しかし、途中で会った男の豆と牛を交換してしまうのです。家に帰ると怒った母親により、豆を庭に捨てられてしまいましたが、次の朝にその豆は巨木へと成長していたのです。ジャックは豆の木を登り、雲の上にある巨人の城にたどり着きます。

巨人が寝た後、ジャックは金の卵を産む鶏を奪って家に戻ります。その後、ジャックはまた豆の木を登り、金と銀の入った袋を奪います。しかし、ハーブを持っていこうとした時にハーブが喋り出し、巨人は起きてしまうのです。急いで地上に戻ったジャックは豆の木を斧で切り、追って来ていた巨人は落ちて死んでしまうのです。その後、金の卵を産む鶏のおかげで、ジャックは裕福になって暮らすというものです。このように鶏には、「天上」に住んでいて「金」と結び付けられるイメージがあります。そして鶏と組むことが「長者」につながるということになります。

また鶏は、「朝日に向かって鳴く」ということが知られています。そして朝日という光のイメージから、「金」と結び付けられて考えるのです。そのことは、「金」で「長者」になるのではなく、「朝日」を得ることによって「神を味方につけた」というような考え方につながっていったのではないのでしょうか。まさに「稲が酒になるように」、様々な努力がちょうど実を結び、そして「実りを収穫する」というようになっていったのではないかと考えられたと思うのです。そのような状況で酉年の「酉」の字が「鶏」というような感覚になっていき、庶民にわかりやすく、なおかつ「酉」という字の意味がイメージしやすいように「鶏」の字になっていたのではないのでしょうか。また、その意味が「鶏」という動物のイメージとうまく合致して、「酉年」になっていったということになります。

さて、長々と酉年に関して説明してきましたが、今年「丁酉」が皆さんにとって「陽気の充溢して酒熟して気の漏れる象。陰気の熟する所の年」の年になるのでしょうか。ただ、十二支十干に身をゆだねるのではなく、「自分にとって実りのある一年になるよう」に努力をして、頑張りましょう。